童話の絵画表現について

東京高等保育学校　内山憲尚

一、意図

幼児が童話を聞いて、どんなところを表現するか、どんなところに興味をもつか。同じ話でも普通の童話（素話）の場合と紙芝居の場合とによって、とらえどころにちがいがあるか、その表現に差異があるか、ということを調べて童話や紙芝居をあつかう今後の参考に資したいと考えた。

二、方法

童話「花咲爺」を選んで、四月中頃に、二年保育の年長組の幼児三三名を対象として、素話で話し、これをそのままテープレコーダーにとって、一か月の後に「花咲爺」の紙芝居を見せた。その説明は前にとっておいたテープレコーダーを用いた。（「花咲爺」を選んだ理由は、話に変化があって、絵に表わす場面が多いからである。）間をおいて、二日にわたって行ったため、欠席者を除いて、両日とも調査を受けたもの二十六名で、これをもととして調査をした。

三、どんなデータが出たか

1. 全員のうち「花咲爺」の内容からまったく離れたものを描いた幼児は一人もなかった。これは、一年間保育してきたことによるものと考えられる。

2. 素話のときと、紙芝居のときと同じところを同じポーズで描いているものは男児で六名、女児で三名で、その表現しているところは、桜の花が咲いているところである。花咲爺の話では、ここがクライマックスであり、幼児たちの印象も一番強く感じるらしい。

3. どんなところを表現しているか。

幼児が素話で聞いた時と、紙芝居のときと、そのとらえて描くところにどんな差があるか、これを種類別、男女別に調べると次のような結果がでてきている。（第一表）

【第一表】

表現箇所＼項＼男女	童話 男	童話 女	童話 計	紙芝居 男	紙芝居 女	紙芝居 計
1 花がさくところ	4	4	8	2	4	6
2 畑から宝が出るところ	1	4	5	1	1	2
3 臼から宝が出るところ	2	0	2	3	2	5
4 お爺さんのおうち	1	2	3	0	2	2
5 小さな松を植えるところ	1	0	1	1	2	3
6 松の木が大きくなるところ	1	0	1	2	1	3
7 犬とお爺さん	0	1	1	0	2	2
8 犬の墓	1	0	1	1	0	1
9 其　他	1	3	4	2	0	2
計	12	14	62	12	14	26

上の表で見れば素話、紙芝居ともに花の咲くところが圧倒的に多いのは、この話のクライマックスであり、幼児の興味の中心がここにきていることを証明するものであろう。

畑の中から宝の出るところは素話に多く、紙芝居では少くなっている。臼の中から宝の出るところは、これと反対に紙芝居の方に多く素話の方が少くなっているのは、

素話の方では、畑を掘るところにポックラコというリズミカルな言語表現をしているのが印象を強めたらしい。臼の中から宝の出るところは紙芝居の絵が美しくはっきり描かれていることによるものである。

松の木を植えるところ、松の木が一夜のうちに大木となるところは素話の方に少く、紙芝居の方に多いのは、絵からくる印象がはっきりしていることによるものである。

以上のデーターで見ても、素話の場合と紙芝居の場合とでは原則的にはちがったものを選ぶようである。これは視覚と聴覚との印象のちがいから生れるものであろう。

ただし、非常に印象の強いものについては素話と紙芝居と同じところがとり上げられる。たとえば、花がさくところは、興味があるからである。

四、童話にも紙芝居にも表現されないところ

童話と紙芝居と両方ともに表現されないところは①犬をころすところ②臼をわるところ③臼を焼くところ④畑からきたないものが出るところ⑤臼からきたないものが出るところ⑥隣りの爺さんが縛られるところなどである。隣りの爺さんが灰をまいて花が咲かないところを描いたものはたった一人である。このどれもが悪の面であり消極的な部面だけである。幼児の持つ詩的正義から悪をにくむと共に、善にはよろこびと興味を持つが悪に対しては意を留めない幼児心理がよく現われているように思われる。

五、童話と紙芝居の表現のちがい

童話と紙芝居の表現上どんな点にちがいがあるかということについて、一瞥して見ると次のごとくである。(第二表)

表現は童話の方が単純で紙芝居の方が複雑である。これは眼から入るものの方が数多くとり上げられるからであろう。

構図は童話の方が自由でのびのびとしている。形の点では紙芝居の方が調っている。

童話の方が色彩が淡くて、タッチが弱いのに反して紙芝居の方は色が濃く、タッチが強い。

童話で描いた絵は想像的で、大まかであるのに対して、紙芝居の方は型にはまっていて、小さくかたまっている感じである。

【第二表】

種項	童話	紙芝居
表現	単純	複雑
構図	自由さがある	調っている
タッチ	弱い	強い
色彩	淡	濃
内容	想像的	型に捉われている

六、結果として

全部の絵を通して次のようなことが考えられる。

1. 表現や描き方がちがっている——これは印象の差であるのと、視覚に訴える場合と聴覚に訴える場合との差である。たとえば、臼の中から宝ものが出てくるところで「臼の中から小判や宝ものや白いお米が出てきました」と話したが、童話によるものは、黄色いお金(金貨か小判)で表わしているが、紙芝居の場合には白い米が流れ出ている。これは紙芝居の絵が、白い米のあふれ出ているところを描いてあるから、そのまま幼児が表現しているのである。桜の花の咲いているところも、素話の花の色はさえて美しい赤であるが、紙芝居のものは色がさえていない。これは印刷のよくない色からきているのだろう。

2. 印象の強さのちがい——印象の強いところを描くのが普通であ

るが、視覚による場合と聴覚による場合とは自らちがっている。視覚の場合には色彩の強いところや、誇張的な表現のものを描く、たとえば、松の木が非常に大きく描かれているので、これに興味を持って、紙芝居の場合は松の木が大きくなったところを描く、(童話の場合は犬の墓に小松を植えたところを描いている)それから童話の場合はリズミカルな言語表現のところが描かれているのは聴覚による印象が強いからである。

3. 結論的にみて——童話と紙芝居とは全くその性質がちがい、幼児の受けとり方がちがっている。この意味において、童話と紙芝居(その外視聴覚教材)はできるだけかたよらないように、各種のものがとり上げられなければならない。

最近の保育の実際を見ると童話が少くなって、紙芝居が多く与えられている傾向があるが一考を要するものと思う。

子どものしつけに関する一調査

東京家政大学児童研究室
森　重　敏
上原万里子
内山綾子

I 目的

この研究は、東京家政大学付属みどりが丘幼稚園における、幼児のしつけに関する実態の調査を目的とし、しつけの実態を(1)子どもの生活実態と、(2)母親の教育態度との両面から考察したものである。この結果の理解を容易にするために、都内の二つの小学校の一年生について同様の調査を行い、さらに奄美大島の小学校一年生と幼稚園児について調査し比較した。

II 方法および手続

方法　質問紙法

対象　みどりが丘幼稚園児の母親　三一名

比較対象　四谷第四小学校一年生の母親四四名、池袋第三小学校一年生の母親四七名、奄美大島(沖永良部島和泊町)の幼稚園および小学校一年生の母親一二六名。

手順

各施設に母親に集ってもらい質問紙を配布して、問題を一項目づつ解説しその場で記入してもらった。質問は主に多肢選択法による。

調査期間　みどりが丘・三一年一

(表　1)

	みどりが丘幼稚園 大島	東京小学校	奄美幼稚園	奄美小学校
	%	%	%	%
るすばん	46.8	52.2	73.0	51.0
田や畑に食事やお茶を運ぶ	0	0	50.0	45.0
水くみ	3.2	4.3	46.2	25.0
子もり	6.4	6.4	59.5	58.0
家禽家畜のせわ	6.4	2.1	59.5	39.6
草刈り	0	0	23.1	19.6
お使い	86.4	87.2	87.5	96.0
家の掃除	25.6	31.9	73.0	67.0
たきぎとり	0	0	34.6	16.0
食事の用意や後片づけ	35.2	27.7	34.6	27.6
草むしり	16.0	0	49.0	29.0